

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

③教育効果・成果についての検証と教育プログラムを改善するシステムの構築

●東北学院大学文学研究科アジア文化史専攻

「遺跡遺物資料処理技能開発の日中韓協同推進」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本取組における教育的効果・成果については、シンポジウムや研究会、さらにはホーム・ページ、刊行物『AHCS』を通して情報公開を積極的に行ってきた。しかし、効果と成果の検証は、取組担当教員と関連教員から構成された「大学院 GP 委員会」および大学院生から構成された「東アジア文物考古研究会」という内部組織間、あるいは国内外の招聘講師からの助言というかたちでしか行っていなかったため、客観性を欠いてしまった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

本取組の組織構成において、「外部組織構成員」による厳格な検証に対する意識が不十分であった。「史料情報処理技能の習得」、「学外実習」、「公開行事」を実施し、一定の効果をあげたことは事実である。しかし、「学外実習」は全院生の参加原則を念頭に置くあまりやや総花的となり、「史料情報処理技能の習得」と乖離する性格のものもあったことは否めない。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

予め「外部組織構成員による検証委員会」を設置し、効果と成果についての客観的検証・評価を得ながら、「学外実習」についても「史料情報処理技能の習得」により特化したかたちのものを厳格に選別すべきであった、と強く反省している。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

《人社系》

●東北学院大学文学研究科アジア文化史専攻

「遺跡遺物資料処理技能開発の日中韓協同推進」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本取組の一環として中韓の第一線の研究者を講師として招聘し、中韓口での教員の引率を伴う院生の「学外実習」も積極的に展開した。また、本専攻はこの間、中国社会科学院と武漢大学から客員教授を毎年招聘した。しかし、取組実施中もその後も本専攻の院生が留学をするとか、内・外部の中期的な調査に参加するという効果がなかなか生まれない。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ①確かに中韓口での「国外学外実習」はいずれも1週間程度の短期間で、外国語ができる教員の引率や通訳の同行があった。
- ②留学も含めて中期的な調査を海外で行おう、英語を駆使する自助努力をしようという意識を促す教員の努力は、必ずしも十分ではなかったし、海外調査に対する意識の低い教員がいることも事実である。
- ③景気の低迷による保護者の経済的な問題もあろう。
- ④本取組自体に大きな影響はなかったが、取組終了後の院生の「国外に対する意識」の持続性と発展を見据えた対応は、教員・院生ともに十分ではなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

本取組においては、予め「国外学外実習」の期間を内規で1週間程度と決めていた。しかし、院生の「アジアの歴史と文化」に対する意識を高め、留学を志すような者を出して行くためには、院生の安全性と教育上の配慮に基づく教員の引率を一部取りやめるとか、「国内学外実習」を厳選して、「国外学外実習」のなかに期間を1ヶ月程度とする実習も厳選して実現する等の試みも必要であったのかもしれない。